特別
イ4
3163
24(1)

貴
14
3103
240

和漢朗詠集

東都書肆 須原屋伊八 梓行

山陽先生著

和漢朗詠集巻之上

春

立春　子日付若菜　春興　春夜　子日付若菜

三月三日付桃　曙景　三月尽　風三月

雪　霧　雨　柳付烟柳

花付梅　鶯　歌

夏

更衣　首夏　端午　納涼　晩夏

郭公　雲　蓮　深　夜

和漢朗詠集巻之上
春
立春　子日付若菜　春興　春夜　子日付若菜
三月三日付桃　曙景　三月尽　風三月
雪　霧　雨　柳付烟柳
花付梅　鶯　歌
夏
更衣　首夏　端午　納涼　晩夏
郭公　雲　蓮　深　夜

春　詩文　九十七首
和歌　四十六首
夏　詩文　三十六首
和歌　二十三首
秋　詩文　九十四首
和歌　四十六首
雑　詩文　三十二首
和歌　十四首
釈教　詩文　三百廿五首
和歌　八十八首
通計　詩文　六百八十四首
和歌　二百十六首

秋
立秋　七夕　秋興　秋晩　擣衣
八月十五夜　付月　九月九日　付菊　九月尽
女郎花　萩　菜　槿　お茂
紅葉　付落葉　鹿　付鳴ノ出　雁　虫
雪　擣衣
冬
初冬　冬朝　歳暮　炭竈　爐火　霜　雪
氷　付去氷　霰　佛名

和漢朗詠集巻之上
春
立春　子日　若菜　霞　鶯　梅　柳　桜　藤　款冬　躑躅　山吹　暮春　三月尽
遅日　閑居　不逢友人　惜花　落花　帰雁　雉　蛙　閑庭春興
将来可愛之思
池凍東頭風度急　寒梅如面雪封皮
柳無気力　一任春風　一任春風
今日不知誰計会　春来春去水一同
歌而弾文　寒蕤霜雪生香火　暁燈燈

▲夜のうちにそも降りやむびうれの
ひちそへむしてさむとふゆうつ

▲きのうよりさらにさむしきのふ
よりもさむしとおもふ

○水きえて田地よりのみちくさの
えだえだをみるにかぜのふきさら
ひのごとくまがれるをみて

○まのあたりにかぜのふきさら
ひのごとくまがれるをみて

○まの氣色をうかゞふに少女の
迷ふくらゐにて更にあてうなゆえ
柳のまのえだ幷小ちさむくおもへ

○もゝ虫うさゝびのまばのうのごく
えのうくまうたる人のまをうきうさ
まざむきあのやうにうかれ出ざる
きのふのうろうさうろうさんびり
いつまでもいつまでもとなて

▲今年もくまの凡よ初けてぞ
あふそうちをきるこの花と

のべのうへのおけくちものどかなる
春のはつひざのつゞきなつて

○それのりくわをぶんとうしもうれく
なのがをしほとをくまの凡をきゝすむ

○まのはのまお芳ふさる秋よりさをく
当ごにまのうらうるる天ハあらの雨と
まんごとれな秋糸律私くるまのそーよ
そうぶくうきやくいてそうけるそうさ

○まへうとうひほをとりてあをふくあ
まのうえもやみくこゝろ一日よ智ん
まを思ふ凡ぞをおもまつてくるれ

○こゝもとあをも秋さ日ようつ紅葉の

庭増乱色晴沙緑林愛客舒高白
いてそくいつふ
やまうをふ
うちりうをは
ひそうむひ

春無

野菜花紅秋社緑豫孔雀天
歌酒家く
山桃漫郊

社ひちくうつ
まをん
水消田地雁起去入枝除柳眼低
先遣和風報消息緩教春浪来
東岸苑梅
之梅花落
柴扉掩厳人奉手焚玉壺雀雅統
乳燕風掛新柳鶯歌浪洗旧苔鎖

岸柳風穿綰糸綠

着野屐多踏緑苔遊蹤処

望歌聞月思情深書風変

林中花鳥時雨後至外趣

春夜

霞朧月籠春夜

宵燈無数映池水

侍松樹

侍松根乳味

業養亀齢

花前掃頭二月

林のひ

子日

子日の祝ひ

○寛平八年三月三日の宴に、松の風樹ふして北野もかすみ渡りきこえわたりて、池の水ゆたかにうるほふこと、ことのほかなりければ、

○物よりはまさきの葛ぞ少しうき世の人の心なりける

○林の中より鶯のさそひ出でたるやうにて、花をうかがひありくもをかしくぞありける

○月の夜よりさきに、ふと思ひ出でたる人のもとへ、

○梅の花ちるをいとふ風よりもうつろふ色のむつましきかな

▲四月ばかりに、まゐれといふ人のもとへ、

○郭公いつしかまちてなきつれば

きのふもけふもあやめぐさかな

▲それさうれいにおもひかけぬものすゝめてもとおもふものから、

○郭公なきつるかたをながめやれ

ちぐさの花をよそへてぞ見む

▲さきざきの花のころはかくすゝめもらすを、

○寛平八年三月三日の宴に、松の風樹ふして北野もかすみ渡りきこえわたりて、池の水ゆたかにうるほふこと、ことのほかなりければ、

○物よりはまさきの葛ぞ少しうき世の人の心なりける

○林の中より鶯のさそひ出でたるやうにて、花をうかがひありくもをかしくぞありける

○月の夜よりさきに、ふと思ひ出でたる人のもとへ、

○梅の花ちるをいとふ風よりもうつろふ色のむつましきかな

▲四月ばかりに、まゐれといふ人のもとへ、

○郭公いつしかまちてなきつれば

きのふもけふもあやめぐさかな

▲それさうれいにおもひかけぬものすゝめてもとおもふものから、

○郭公なきつるかたをながめやれ

ちぐさの花をよそへてぞ見む

▲さきざきの花のころはかくすゝめもらすを、

野中芳菲業世事推移感慨係之
偕人賦得桃花
三月三日桃花
春水通津桃花夾岸漁舟何處泛
桃李園中三朝飲酒
今日宴罷明日後一日遠方後期無

排水柳花万点滴楊家衣
低翅沙鷗濕曉烟隔水漁
人更少時還惜春今日好
劉白莫知二今年
三月杜工部
苗去々不見人鶯聲猶風
鳥啼竹院香花滿空

胭脂去帰苗和淚染花下淚英春
送去不用勤手酌一杯勧君更尽
君知故人在西出陽関無故人
そのくにはたのもしきかな
風のたよりにつけてもこと
ならぬ世なれば
ふるさとをこふるこころ
あるものをみなならぬ
そらのもみぢかな
今年風立春三月劉元重陵二月

○柳のえだにふうれてめ面をはらふ
○梅のかおりをしてくるをしらず
○花さくよりつきを明よあすは二月のひを
○劉禹錫と白氏文集とを日ぼんの枕
○若い竹をうえて隣よ那きを
○胭脂いろのうをとりそえてきを
○まくらの風ちる花のまへをあしびき
○人をとろかすやうなまどもちゆきもまた
○春よ恋しくて一年又一年光よ春のうしろ
○せべて人をとりこめてそだつ
○土のむと下の白のはなよこそ入見ぬ
▲花ちり春もゆくかたもなくうぐひすの
▲ふるさとは春のくるのもおそからん
▲ちりぬとて春のゆくをばいかゞせん
○うつひすよ春のもどりを告てくれ
○人をとろかすやうなまどもちゆきもまた
○春よ恋しくて一年又一年光よ春のうしろ
○胭脂いろのうをとりそえてきを
○若い竹をうえて隣よ那きを
○劉禹錫と白氏文集とを日ぼんの枕
○花さくよりつきを明よあすは二月のひを
○梅のえだにふうれてめ面をはらふ

湖辺欸冬遊
舞雪梅花
花梅湖辺
さくらはな
人もまちえて
冬
鶯波暗去声
鶯波暗去声
問青山客

く少くかくるゝ雲のそこつけしきまでうとゞ
◓わさみぢくいまそうのうみめをきまく
松のみどりいまそうのはまをこゝろとゞ松にバ
◓浦山風松音のはやうちひすいたるを
つゝれをぬやるあくいみのかんむとゞさとゞ
○わけ行のうちますこゝろひく少水よ
うくまきのそらみどりまそれまくうれ州
をへ山ちうりやのこのうらぐく
○まおさくいんのころ駒色のをきう
あゝめをあまうらぐくふて地
あるこまよるまいくいんおさうのびが
まさくひんバ一股やもうぬう
◓うの松うへきのふりしてふまをて
をくやまうよとうの
◓あさうまおきぬくれいぐと
おやうのくふいうちうて春のかさこゝ
○まの花まうくまぐくれバ
かゝーみをまくこゝ雪梅春のそうしバ
かりくゝへのい恩おうくゝ春きは春潤第辛二の
うゝ初人ちくぐ三春をこゝとさまうがい
とのぐとく初んのおくうは春くそれゆ

雨

鹿

霧晴後放火事嘯猿妨獵

擬詩客張三李四跨樹觀猿

○滝のうる祖ちまでそさて像ぐけ
時はちくうつまをくもぎき
花枝のかまでもてう駆ゝ謝恵と云
武陵郡のもうる芳そてまで秋の
あ中まんゆ中お表をたてまつて答
うくく乳泥とぐくの泥辺の物のいろ
ぶ表面ま二一泊をまゝうこう

○表面ぶうくうひ花をさすぶ柳
のうやゝ医者ぶ君臣佐使のう
うちあくゝ病を治うる草木をそ
面ハ花の葉面ぶをさうあん表良無ゝ
○表面ま花ひらさ面ぶくお日うひて
うの葉ぶ花くくゝ中ぶれの面まうくゝき
○斜てうる面の柳ハうてうまき鳥ぶまゝ
ぶこくくうお枝の面の地ハ枝日ぶさうを
ぎうを中てあさひのぐるうバうぎゝ
▲花ぶそ枝をさぬをさうゝ指とゞ
▲まう面のはや柳のえざよううくくうそ
いとをくくおをつゝぬぐくくうとゝ

○風のさ雪梅春のそうしバ
かりくゝへのい恩おうくゝ春きは春潤第辛二の
うゝ初人ちくぐ三春をこゝとさまうがい
とのぐとく初んのおくうは春くそれゆ

雨

鹿

霧晴後放火事嘯猿妨獵

擬詩客張三李四跨樹觀猿

武陵桃花

暗谷鶯

春深自為花

花新雨後

斜脇暗風

梅 付紅梅

○梅の花ハさきまよふてうらびわくさみ兼めさやさしく柳の糸ハうすみどりの色のきさしあらはる
○白梅のちりくる、雪を飛すことゆるさず梅の花
のさく酒そのむハみどりの色が盃にうかぶ
○紅梅ハ二月わくらさまやうらち雪の気ちかう
中山ハ春風吹きぬききみ咲けると云
○陶潜が門の柳ハ春風ふきてなびき青き糸を
うち出すごとく大庾嶺の梅ハ白き玉をかざる
ごとくひらきかゝやくと云り
○五つの嶺の蒼々と雲のたなびき来るも
ひさきさざるなり大庾嶺にあるかわり
○上陽宮の一春をうつると誰か
しぞ南ハ暖かにてもゝえバ花も東の
枝よりひらけバ南より来るとぞいふべし
▲倭し年ハ色も根越ては根をかりて
▲まとをせとしてまがおりるまへせんと云ひ
▲春の月も梅の花もいふ色もなくすなくも
ちるらんかをぬひつゝハそれ人をうつ
さんとのくすも谷の色ハ野遊也

白片落梅浮澗水　黄梢新柳出城墻

梅花帯雪飛琴上　柳色和煙入酒中

漸薫纈衣新萌蘂　條縁衣風未到之

青絲繚出陶門柳　白玉装成庾嶺梅

五嶺蒼々雲往来　但憐大庾万株梅

誰言春色従東到　露暖南枝花始開

いかしゆらしてうへしけゆくれ
まろ木のむ見えてたてるさまなり

わかせこに見せんと思ひしむめの花
それとも見えす雪のふれゝは

かをとめてたれをらさらんむめの花
あやなしかすみたちなかくしそ

○紅花ハ丁香の色あるく鶏の舌に似たり
梅ハ鶏舌香を含むの香あるのとなりけれ
おかのらせうつり瑕ハ赤き玉也紅梅を
わかてうと云の色の文を也
○仙人の茶方に傳香紅わりと云梅れ
うすみあかの嫁婦よりのわかきゆきも及バず
ろうそくのかざりさかハ妓女のくさき
そのまうの炉のほつりも及バず白き梅よゆづる
○紅梅の色ハ酒のかきの色をもうち出し
ゆかひのかげの中に日の紅はまだひさまかごし
○紅梅の風にちる紅葉よりさきも香をつきて
笑とするまうすみえて紅さ似たり
にさきくる紅梅が炉火のわてらあるとくえけ
されども火ほわかれハまだわげず
▲ことをも香をもとしらせて紅梅と知る
▲人の花をあつるハ色香をしらぬ人ある
人のあかわハ谷の一本も花をもぬ世を観ずべし
○林よめくうひすの声が筆のとおさそて
えいにもゆきにゆるしいつもまかる也

紅梅

梅含鶏舌兼紅気　江弄瓊花帯赤文

浅紅鮮娟似上方之霞　宛色濃（？）先笑郷

妓鑪之譲薫

背遠易分猶有底　無情難辨夕陽中

仙間風生寒鼓雪　野爐火暖未揚煙

君ならてたれにか見せんむめの花
いろをもかをもしる人そしる

ころもとをもとめひもいますむかしのその
はるのしぬよるまえてそこそ

柳

林望ほ変化の多き柳雅致ある
潮那拂他驕馬客来多慶幸の上物人
亜女廊花紅粉脂無村物業行商
知老去風情少見ひ争雪一白詩
大度歳月の むめいもの
雲雀紅粉投業日長閑美隣物風
愁宅遊時屋月陽漫更亜日水燕原
深ん月池交投柱屋に風兼泥梁歌

▲まり物 なびくうり花もさきそろう
▲そうでれその春うきか第一
▲物のめをつくるまでおもをさぬきまる
そりうとさくないこのものようのこうもの〳〵
物ハ主で変化れバ多くまるこ
●池の武者文門よりのごひらきて上林
苑と名づくるそうこうとき彩そう
るゝ九そのちまちを作第一人のぐ
ちをそせてやさうしと梅花をつくり
遠国でをこまろきかよろの月
うるうよいうの物でてしみぐこう
●池のうこあをくおいよろうこと
れのうれるひうかきたのぐくま
をゆくこてゝきれ花よのゆまんろく
●たつてきもゆきてゆくきうきも
ゆ一ゑ花んよ入まのめをびのうん
●花を出ようう日よみき風よみぐと
てよくゆうをもさくあようつげれ
をさきをきをれ果方男のむこうる下のゆハ
ぐよにんゆ一ゆそう一入をそそ

あをやきのいくるもそくもくるもとろひみる
ほるうしいもとろうろ
あをやきのまるうろ
雲のうるうろ

花

花の工苑柳斜月莹る叢こ
池色活く莹ゆ花光煽く雪焼雲
翌二見人家花便入ゆ海半勝白歌源
莹日室風る俗ゆ額百歌こ玉流枝

くれなゐなりしかさしていふはくれなゐのいろく
桜とみるをむすびたるなり
○たれかいひし水にこゝろなしとたれかいひし
のうえんハ花のいろのこきをいふ人の心なきを
変ずるとハ花のいろの水にうつりて波
うちのはるかにうつりて唇を動かす
○花のものいはぬをたとへて花のいろも見えぬ
池の辺女のへよりくろへうつるがごとくなる
うつる花をそへてわかれぬれば蜀の江の
人がみきをわたりやのわざなるにくてぎ
○花のみきハいかなる糸にておりたるといへば
ゆふべの霞いろくおりたる文ぞきそうたる
まへにもたゞ春の風といふなり
○花のみきのこまかなるをいへるのみ
みきにおりたるものハ春風にて錦を裁成の
○おもそへの十一さうじ
もとおりたるをいひてきさを
おりそへのもの
○眼にまかする蜀花ハ蜀江のみきの織錦
つくりてきく筝の曲をきく

漢江表裏一入春入紅

誰謂水無心濃艶臨兮波変色

誰謂花不語軽漾激兮影動唇

岸頭之水則漢女粉粧浣清漾

岩頭之花亦蜀人濯文之繍叢媒

織自何絲唯當面識紅粧紅錦風

花飛如錦濃淡春風東錦

機春風裁巧非唯織女戴芸

眼見蜀郡欲衒耳聞秦城調筝

世中にたえてさくらのなかりせば　業平
はるのこゝろはのどけからまし

わがやどのはなみがてらにくる人は　躬恒
ちりなむのちぞこひしかるべき

みてのみや人にかたらむさくらばな　素性
てごとにおりていへづとにせむ

落花

落花不語空辞樹　流水無心自入池

朝踏落花相伴出　暮随飛鳥一時帰

春花面々闌入酔郷　送暁鶯声々

縁糸謝觴之座

落花狼藉風狂後　啼鳥龍鍾雨打時

むかしありくへしはいまはちりしかれてはなのまじり
▲桜花の咲ぬるまちかねて春ひとをまつてみ
風をいとはむ桜すくハ人のこゝろなるらん
▲花のちりなむのちぞこひしかるべしと
いふなるけるかな
▲人ならずのこゝろをかたりつゞけるなれバ
花を手ごとにをりて家づとにせんと也
○花ハものいはぬもの也しく樹の枝を
辞し去ることハ落花なるべきこゝろなれども
池をはなしておち入るにハ宗家あり
○朝にもまつて落花をふみながら
出日暮ハ飛鳥も棲にかへる也一時にかへる也
○こゝの花をながく宴をあそびて酒をのむをしぼて
人のそのうち乙房に花をたのしくめぐみて
かぞへれ入るにまどふのうちひらきて鶯を嘆じて
謝鶯のうかりしめまいるなり
○風あらきのちおさまる花地にみちる
かずがに鳥まで啼鳥ハなきてあらそふ
ようふくたらそそふなり
○鳳凰の落を飛ぶるのまゝ文王之り樫り

離閨風翅漏揺葎小梅狂秋屋漏

さくらもる
そよ〳〵
ゆるのもる
らのもる
ものもる
やにもる
ものもる

鄰燭

晩菜為開孔鄰燭秋房初法白美蓉

やのひと
ゆうの
えん

熟苑堆人那約事把童今家色折得

夜
天

歌

書完賀表相收拾沿紙半文未乾

慢重巻三月要

芳

裏更衣

まだよく乾かぬ半紙を用ゐる

○巻頭の巻名は二月の巻ゆゑ花の字を書く

○巻末の署名は三月の巻ゆゑ芳の字を書く

▲ひらがなは女文字ゆゑ

▲ひらがなは女文字ゆゑ

○巻頭の巻名は二月の巻ゆゑ花の字を書く

○巻末の署名は三月の巻ゆゑ芳の字を書く

貧無殘活計窮猶罪箱中有書多
生衣敢結二毛客頭不梳白髪人
前菱
翠黛紅顔誰家婦
風生竹夜窓寒
夜菊
風吹花冷香

秋涼

書齋清夏

不見孫盧

題壁好風

燕昭重招

門見新蟬

池塘水動

書齋清夏

不見孫盧

題壁好風

燕昭重招

門見新蟬

池塘水動

竹亭法會

晩景

花橋庄

投業垂綸

▲ちはやぶる天神の御と見ゆるや国(?)を…ひはくさ(?)まへ我の…をまつりて…
○はちすの…風わたりてまきちらく…
○はちすのまとき葉のひてかきぬるる月…
○みりのさう中のこ…の扇をかるき
清き風をとすゝしさすのもの、を扇ふ…そ
紅葉(?)花のさき…
○竹のえだ…ねぐら…
○胡(?)風は呉山の葉の…えいらく其曲をなす…
○蓮を是聞す法花経は仏のめをあらはす…
▲みぐりをまぬ…

ちはやぶる神まつる夜のなかめ(?)をかけん
むかしの人これ神のうそもあれ

蓮

風荷老葉蕭條緑　水蓼殘花寂寞紅

葉展影翻當砌月　花開香散入簾風

煙開翠扇清風曉　水泛紅衣白露秋

岸竹枝低應鳥宿　潭荷葉動是魚遊

獨(?)行更覺呉山出　佇見君子下堂(?)

經爲覺(?)門佛爲眼　知何(?)涅槃中蓮(?)根

はちすはのにごりにしまぬこころもて
なにかはつゆをたまとあざむく

○わけ…のさまがわすれ…
▲一聲…
▲…
▲二声の…今一声…
▲ねざめ…
○わする火ぐれ飛ぐ秋…
○…
○晋の車胤…
…孫康は…

郭公

一聲山鳥曙雲外　万點水螢秋草中

さつきやみおぐらのやまのほとゝぎす
なかまかし…
ゆきかへり…

螢

螢火亂飛秋已近　辰星早沒夜初長

蒹葭水暗螢知夜　楊柳風高雁送秋

明(?)々猶遲(?)月光於庭上能(?)瀾(?)

月のひかりをかくすに及ばずかゝるをつゝむに及を
○蛍火かゝく山遶をてらせバ蛍が山のくまぐまを
照すとうつくしくまことにてるやうに見ゆる海棠
をみれバ池のおもてに蛍がちるとおもふ
▲ふさむやの山る火をおもしろいきのとも
そ火とみてたか風のきこえぬとそさて八
わするゝとおもしろきなり
▲涼しきものゝこゑにれとのおもしろきこゝろの
宮女の門へ鼓をきゝてあそびをひゝしを
楊女ひくときゝとあり
○むかしいかゝに宮をかやうなる秦の始皇
驪山に非常のあそび温泉のおもしろさ
さて宮の風のふききはしむかしはなきく
宮をおもひ樹もいろつきて紅なる
○春くつくるうちにはせみなくかやうなる
よりの梅雨をかゝりて五月の雨ふりて
せみの声ハ五月の麦の秋をおくるとなり
○鳥ハ宮の野かれしもの人かれて秋の
くさきにとまりて漢宮もさびしく
宮のさくらはしもくちてさいへいの宮の

蘆檝當門於床頭
山遶書殿色池浴賦篇中流
夏山のあゆみきあるこゝろ中のこりしひ乃
りかよふくるゝをわするゝなりけり
をくとくもとふくかせのハすのしも
別ありあへるかねまつかひるりかるも

蝉

遲々兮春日玉甃暖兮溫泉溢嫋々
兮秋風山蟬鳴兮宮樹紅
千峯鳥路含梅雨五月蟬聲送麥秋
鳥下綠蕪秦苑寂蟬鳴黃葉漢宮秋

○今年ハ例年よりもせみの声もかなしく
物さびしくきこゆるのこゑかなるおもしろくれ
猿客かなしくおもふむねうつくしきゆゑ
○年ハさりまれとてもせみの声ハ年々同じく
されバ秋の後をぬけのうつせみとなると八
いふべからず
▲夏山のこゑのこゑハわきまへきこえ
▲そのいろ女よせみのをぬけをつゝみ
つかすそてをあゆうそぬと云べければそ
うことなくにのまゝに出るとてかくせを
のうくもなきことを云し纏
○盛夏にあつき夜も雪のことく光の
風ハ冬と同じを年のうちにもの不絶まで
吹きぬ風ハおもひをしバ秋のすゞしさ
をものうちにあつてかバ月をくろうするる
○月ハ扇を朝して出すとを云れ扇の
月は入ひて扇をまちかねさりまう
月ハ秋を蛍かれども夏ハ秋風をぬ
夜の扇をとりておもふ
▲天の川秋の来まつ七夕の扇にて涼しき

今年異例腸先斷不是蟬悲客意悲
歲去年來聽不變莫言秋後遂爲空
夏山乃こゑのゝけしきは
そらのこゝろもなくきくゆふべ
うつせみはひとゝとゞむれど
たまのゆくへをみぬぞかなしき

扇

盛夏不消雪終年無盡風引秋生手
裏藏月入懷中
不翫盛夏初涼唯號秋風未許
あまの川かはへすゞしきたなばたに
あふぎのかぜをなほやかさまし

▲わかきみの御めくみをあふきの風にたとへ此風ハ天下の万民艸木までもこれになびくべしといへるなり
○蕭颯ハ秋風さつ〳〵と涼しき風に我老鬢の
はしめてしろくなりたる人の付そへて秋の来るとき一時に
かくハあるとなり
○鶴ハ庭にある木をいへ紅葉する一葉の
庭にちるをまたへきハまさに初秋の知らしき
わかき一流に桐を諸木とひて鶴の
声ハ桐の上に鐘鳴ハ庭といふて
庭に一葉ちるハ秋風の声もあく晩に来れ
そのちる声をきくなり 鐘ハ孔子の学者の講釈のなり
○さやかハあさやかといふこゝろ
○うちつけハさしあたりといふことばなり
○暑ハあつさ三ふくのあつさなり 晋潘岳
かくちまされもしか三十二の時鬢に白髪
二毛まじりたり三十二を二毛の年といふ
こゝにあつさのさるとのとあるんで月の
すゞしく秋の来るをいふなり
○槐の花も初秋のあはれなり さくのそら

あすのうるさあつさのかせに夢かされく
そこりまきんもとろこのさきのもし
手もたゆくならすあふきのみせるわか
るひうぬくさもあしとそおもふ

秋

立秋

蕭颯涼風与衰鬢 誰教計会一時秋

鶴漸荻間秋色少 鐘声遠処晩風微

あききぬとめにはさやかにみえねとも
かせのおとにそおとろかれぬる

うちつけにものそかなしきこのはちる
あきのはしめをけふそとおもへは

早秋

徂暑随三伏去 不知秋逐二毛来

槐花雨潤新秋地 桐葉風涼欲夜天

炎景剰残衣尚重 晩涼潜到簟先知

あきたちていくかもあらねはこのねぬる
あさけのかせはたもとすゝしも

七夕

憶得少年長乞巧 竹竿頭上願糸多

二星適逢未叙別緒依々之恨五更

将明頻驚涼風颯々之声

露応別涙珠空落 雲是残粧髻未成

去衣曳浪霞応湿 行燭浸流月欲消

夕ぐれのすゞしき風によそふ
○秋の日のあつきもさる比ハ槐の花のちれ
まさの夜にしてもまた涼しからぬなり
涼しきに桐の葉を散らすかぜの来るや
秋のすゞしさハ夜のしろがなく知るといふ
▲秋たつといくかもあらぬにこの風ハ
すゞしくおもふなり
○少年の時ハわかきをいふ竹のさきに
をまいて糸をかけ乞巧の祭をなすなり
○牛女の二星とし一たびあふことを去秋より
ことしまでまちわびたる一夜がほどもあくれバ
別れのうらみをふくむなり
○暁の露ハ二星の別をおしむ涙のこぼるゝなり
雲ハたなばたの姫のよそほひの
くしけづりたるかみのさまなり
○去れば時の衣のすそを引きてぬきて
天の川をわたる手に燭をもちて

月ハ西ニ傾キ雁ノ一行ハ南ヨリ来ル

○云ふもさらなり

○ゆくとしもこんとしも月のさやけさを

▲むすびおきしたもとの露の秋風に

○吹落ちぬとはおろかなる人の心ぞ

▲その川上をさそうきふるごとを

○秋の風ふきうらみ

ひさすに横ふ

○人の世ならひ

▲むすびおきしたもとの露の秋風に

○林の白き酒をあたためんとおもふ

○秋の風ふきうらみ

○風吹くものとあるべし

○蛩ハ秋ノ末ニ

一声や月のえだのもとに

○いまれのハ和漢共に

▲秋風ハいつともなくぬしなきかの

○松を植うる者よのかりそめにかきそへし

○山のそよ〳〵

うらみきこえてをとづるを

秋興

○松の中ゆく秋の心を

和すとてそ

○云ふもさらなり

○ゆくとしもこんとしも月のさやけさを

▲むすびおきしたもとの露の秋風に

○吹落ちぬとはおろかなる人の心ぞ

▲その川上をさそうきふるごとを

○秋の風ふきうらみ

ひさすに横ふ

○人の世ならひ

▲むすびおきしたもとの露の秋風に

○林の白き酒をあたためんとおもふ

○秋の風ふきうらみ

○風吹くものとあるべし

○蛩ハ秋ノ末ニ

一声や月のえだのもとに

○いまれのハ和漢共に

▲秋風ハいつともなくぬしなきかの

○松を植うる者よのかりそめにかきそへし

○山のそよ〳〵

うらみきこえてをとづるを

秋興

河花激波雖是多人之所翫秋月

風前対酒

あまの川

いくせよ

おひらんあき

やしろのうへ

ぬるよのうそ

林間煖酒焼紅葉

望思猶催故郷之興

大底四時之中

物更月情偏

中秋

賀一陽来復

蜀黍酔色

うつろふ

あきはのを

おもきのうへの

秋晩

根白夕上杉暮立蓼思惟

望之出月

▲[illegible]

○[illegible]

…[illegible]

秋夜

秋夜長〳〵無睡天不明耿々残燈

背壁影蕭々暗雨打窓声

遅々鐘漏初長夜耿々星河欲曙天

燕子楼中霜月夜秋来只為一人長

蔓草露深人定後終宵声尽月明中

蘆[illegible]洲叢孤[illegible]夢[illegible]万里[illegible]

あしひきの山とりのをのしたりをの

なか〳〵しよをひとりかもねむ　人丸

▲[illegible]

○[illegible]

むつこともまたつきなくにあけぬめり

いつらはあきのなかしてふよは

八月十五夜　付月

秦甸之一千余里凜々氷鋪

三十六宮澄々粉餝

織錦機中已弁相思字擣衣砧上

俄添怨別声

三五夜中新月色二千里外故人心

嵩山表裏千重雪洛水高低両顆珠

十二廻中無勝於此夕之好千万里

外名所秋月

聖武金波三十初秋風計会此夕悲
自鏡薄氷凝素魄人皆望見更無疑
月白金迷杜上霜漏永玉敲不可聴
瑤池波色動秋風桂樹清陰玉兎空
金商一奏秋風発揚子江頭客思帰
揚子江頭客思帰帝思孝文人去遠
月

秋水澄来新月遠
天山不尽旧人稀
雁声霜冷砧声遠
滄海救秋海我客揺歌一出釣漁翁

○外名所秋月
○聖武金波三十初秋風計会此夕悲
○自鏡薄氷凝素魄人皆望見更無疑
○月白金迷杜上霜漏永玉敲不可聴
○瑤池波色動秋風桂樹清陰玉兎空
○金商一奏秋風発揚子江頭客思帰
○揚子江頭客思帰帝思孝文人去遠
○月
○秋水澄来新月遠
○天山不尽旧人稀
○雁声霜冷砧声遠
○滄海救秋海我客揺歌一出釣漁翁

▲一ことせの月の光をうつしたれば秋月のまん中はわろうみのそこもとうるおひ

○外名所秋月
○聖武金波三十初秋風計会此夕悲
○自鏡薄氷凝素魄人皆望見更無疑
○月白金迷杜上霜漏永玉敲不可聴
○瑤池波色動秋風桂樹清陰玉兎空
○金商一奏秋風発揚子江頭客思帰
○揚子江頭客思帰帝思孝文人去遠
○月
○秋水澄来新月遠
○天山不尽旧人稀
○雁声霜冷砧声遠
○滄海救秋海我客揺歌一出釣漁翁

▲一ことせの月の光をうつしたれば秋月のまん中はわろうみのそこもとうるおひ

○外名所秋月
○聖武金波三十初秋風計会此夕悲
○自鏡薄氷凝素魄人皆望見更無疑
○月白金迷杜上霜漏永玉敲不可聴
○瑤池波色動秋風桂樹清陰玉兎空
○金商一奏秋風発揚子江頭客思帰
○揚子江頭客思帰帝思孝文人去遠
○月
○秋水澄来新月遠
○天山不尽旧人稀
○雁声霜冷砧声遠
○滄海救秋海我客揺歌一出釣漁翁

▲月は盛りのあはれ深きものぞかし

○社日ハさくの神をまつるつばめハ春社の比来り秋社の比ハ去てくらくて菊をもみよ
わかへる顔もおとしかびくさ咲をみけさう
○九月九日茱萸をさしきくの酒をのむ
さかりのてる日をさし武帝文人の袖ヘさげ
そなへれたるよし魏の文帝菊を鍾繇におくりて
その花を七百歳の十七八歳のごとしとその
なりもよくいつも鮮にさく花を
○こゝろきくは酒をうけ三たびほどしまへる時
遠くともさかなを菊花をうかべてあつまる
のむあうせざれハこのよくあつて酒を
さらにこのうけば暁の星のあまの川をめぐるやう
酒を十分にうけてさかづきのあくさうハとき
あかねの秋の雲をのぼるやうにめぐる
○南陽のきくえんの谷水をのんではみ
菊花をのみてよし三十あまりの人いのちを
長寿にて地脈和のよし仙方日精と云菊をくらひ
延しく五百歳まで寿をたもつといふ
△こゝろ中のきくの露世のそのかのわれ
のごく千代をこえてかゝるなり

九日　付菊

鸞和杜日遊家者菊ハ重陽冒雨
採萸於漢武則赤萸挿文人之頭
縁鶴於魏文亦黄花助彭祖之術
先三遅而吹花如曉星之轉河漢
引十分而蕩彩疑秋雲之出洞門
谷水洗花汲下流而得上壽者三十餘家
地脈和味飡日精而延年齡者五百歳

けふのきくのたもとにやどる白露ハ
いく代つもりてふちとなるらん

○老人の鬢髪をあるものゝはじめてさくをいふ
十分の三分ハ白髪と老ひ之をもおびて咲かゝ
り
○花のうちにそうして菊の花をもてあそぶ
ねどもさくの花のあとにさく花もなき後にさく花も
あれバ別してめでむ
○嵐陰ハ秋の時せんかきの松栢のしげく
あてなところの菊のさき松植とちかくの後木の
のちの書斎のさくを菊をもちぞうてゝ秋のけ
きよう末すべきの芝蘭の葉ハまへにしぼみ
さくのさきくハわざとなる菊
○酈縣ハきく多き地なり村の家々のとみたる
菊花がこゝのふしぎ陶淵明がきくをあいし
垂堂ハあやうき事をいふ
○らんのそのゝあらしもきく仙骨をたもつ
もちわさかゝのゆゑにくさぐさの花をあつめ
きくのまへせの秋をいたるまでしらず
○蓬莱ハ仙人のすむところにさく菊の
うせしきくハやくしの仙人洞の月なれば
ふきをむ月の霜をてらすなる

菊

霜蓬老鬢三分白　露菊新花一半黄
不是花中偏愛菊　此花開盡更無花
嵐陰ノ書軒松栢之潤秋氣子梅
芝蘭之葉先敗
酈縣村閭皆潤屋　陶家兒子不垂堂
蘭苑自然為仙骨　權籬乎修眉長生
蘭蕙苑嵐摧紫後　蓬莱洞月照霜中

こゝろあてにおらばやおらむはつしもの
おきまどはせるしらぎくの花

▲物思ひなく笹まくらをいづる花野ん
まで草ん〳〵あそまのみち〳〵わけゆくさき
▲上ろそろあきのかりとんまくら
ろんばうのうりとんまくら
○やま潮をこゆり秋ゆきのすさまじき名ある
しんうがんの清き遠谷の三の算ちくもも発
う〳〵秋ゆきのこゝろをも秋風のふきうる時よ
さきんとそ秋の里妻生る年のつのぐむ
ぐうきをうく遠山ともゆれいう〳〵
○我ゆく同うく袖をさもる客のそらだにも
ますせあん秋ハゆくてゞにわるゝ
○海ふこうく秋の白浪が文をつゝる
こゝろつゞをゝくうけとめ秋風よ
らうくぶりくちハとゞのつれぎうよ
きをひて秋どの世ゆをとき出ぎ鬼
▲宮の鈴ゝさまきの鈴ゝしの
鈴ん〳〵く秋のそらを待うごゝと
▲そゝぎつをうくうく〳〵も白くなるを
秋のゝうくうくうくゆひのそらぐも
○ゆくとゝ〳〵ゆくゆくもゆくもの

九月盡

孤山清曲如圖新黃綺帳鄉組
今重要白退紅塵喪歡於風悅
頭月孤燈添雜
文業樂憲白髮
女郎花

▲ゆやうくハせそ
▲みうなんハうぐうぐうぐ笹中を
ゆひくのち女郎花そろそろのゝ
○萩よ庵ゆるまの名あり鹿のつりよ
ゝぎのうれさきうく秋のよるまの神
ようゝいまのうつゝきまゆびくゝ
たるゝ時よをての情ぐや
▲ねうや神うゝつまびうるゝびまぎ
かるものこゝゆふきうゝをれびうる枝を
祝ちうゝくゆえとするうゝこゝゝ
▲花のちぐゝまうろうゝゆくうろう
とゆふきまゝかきよおゝこそよ多代
至ゝゝゝゝ
▲ゝぎのかきハ笹ゝうゝ拔ぎう
鹿の妻ハ声ハうんまゝゝとう
ことをもうつぎ引ゝうぐさゝゝ
○萩我のやう秋のまゝおのうゝきも
きまゝゝ葉ゝ声ゝをゝ

女郎花

花色如衣秀葉依露為女郎花
幹結恋思裏為有以第
萩

暖露紫濃花始發百枝葉折一時情
秋野ハ笹わけゆく人ハたれをなのゝ
をゝくゝくゝ
ありやなくゝわゝ
ゝゝくゝれはうゝ
いくゝみゝ
うろうむゝ
おゝるもうゝ
あくさのくのはゝ
ゝゝのきゝ

○日ハ扶桑の枝より出るといふ事ど扶桑ハ日の名也 [illegible]

○つゆ[illegible]花を[illegible]

○琴に幽蘭の曲あり [illegible]

○松ハ千年をへても[illegible]槿花ハ一日のさかへ[illegible]

○人の紅顔もたちまち白くなる[illegible]

○多く世上の花を愛し[illegible]

○[illegible]

○槿の[illegible]

○陶淵明[illegible]

蘭

前[illegible]文有蕭條掬若菊蕙之叢蘿

扶桑豈無影乎　浮雲掩而忽昏　叢蘭豈不芳乎　秋風吹而先敗

凝漢女輕施粉[illegible]似敎人眼泣[illegible]

幽蘭曲裏秋絃韻　夢[illegible]曉枕[illegible]

ぬししらぬ[illegible]

槿

松樹千年終是朽　槿花一日自爲榮

來而不留　薤壟有拂晨之露　去而不返　槿籬無投暮之花

おぼつかなたれとかしらむ秋霧のたえまにみゆるあさがほの花

あさがほをなにはかなしとおもひけむ人をもはなはさこそみるらめ

前栽

多見栽花悦目儲　先時[illegible]開遲

自君閑[illegible]種樹春栽秋要秋

閑思看池花紅日　正是當君鬢白年

當[illegible]種樹思元亮　爲是花時[illegible]世[illegible]

▲きくそうへるハかの元亮を云ひ[illegible]也
とまあらん秋をゝ作せんとするなり
▲ところすつのふをとこそれおもふ[illegible]
[illegible]とハふをわれてつかハすことハわびし[illegible]
▲花を大切におもふ[illegible]
ろひとやせんと花[illegible]
○[illegible]こけむしたる紅葉ちりしき[illegible]
風ふきれ雨ふりたるさびしき[illegible]
○黄纈文るを黄纈纈と云紅葉の林[illegible]
ふかくさむくして[illegible]
○洞中ハ[illegible]
[illegible]錦のぬいもの林[illegible]
○外物の[illegible]紅葉して醉るごときの[illegible]
小松ハ[illegible]秋の酒に醉ず独
[illegible]風の[illegible]落葉
[illegible]
▲[illegible]

ちりをたにをしとそおもふさかりなる
いりぬるときはすくなのかたみ

きみかよのよにもとそおもふしらつゆの
をくみをせにかくれてもなん

紅葉 付落葉

不堪紅葉青苔地 又是涼風暮雨天

黄纈纈林寒有葉 碧瑠璃水浄無風

洞中清浅瑠璃水 庭上蕭疎錦繍林

外物独醒松澗色 餘波合力錦江声

しら露もしくれもいたくもる山は
したはのこらすいろつきにけり

むらくのにしきとそみるさほやまの
はゝそのもみちきりたゝぬまは

▲むかくハ[illegible]
とよもしもりしと云ことぞ
○九月となれば秋ふかく宮中の漏刻の
[illegible]人のおとく[illegible]
秋の雨のふりつづくが[illegible]郷園のさま
下の家ハ[illegible]
[illegible]
○[illegible]庭をはらふ[illegible]藤の
杖をつき[illegible]
○都城文殿の柳槐[illegible]
[illegible]
○梧楸の葉のおちる[illegible]
[illegible]
○樵蘇[illegible]
[illegible]
葛稚仙ハ仙人之金丹をねりし[illegible]
その[illegible]紅葉[illegible]

落葉

三秋而宮漏正長 空階雨滴 万里而郷園何在 落葉窓深

秋庭不掃携藤杖 閑踏梧桐黄葉行

城柳宮槐謾揺落 悲愁不到貴人心

梧楸影中一声之雨空灑 鶴鳴峯上 数片之紅縦横

樵蘇往反 杖穿朱買臣之衣 隠逸優遊 履踏葛稚川之薬

〇紅葉をちらしぬる秋のあらしの声ハ蕭瑟として木の葉のかれたるが石にあたりておつる音ハ雅なる琴のこゑをきくにゝたりと也
〇呉王のそのにハ落葉がまじりて月のよるハ月の光がよけいにかゞやくまさりゆく漢の上林苑の木の葉がちりつくして朝の風の声がすくなしと
▲あすか川のあたりまでかつらぎ山から吹おろす秋風ふきて紅葉がながるゝを山の秋かぜふきしぬらしとよみしなり
▲神なづきの森の紅葉のしぐれもまだふらぬにうつろふと
▲深山の紅葉ハみる人もなくてちる
〇南の方へゆくとて大宮の東より立出 [illegible]
〇潯陽江の色ハ潮水にそひて [illegible] 秋の風がふく時ハ [illegible]

紅嵐落葉含蕭瑟 颯石飛泉奏雅琴

遂夜光多呉苑月 毎朝声少漢林風

あすか川もみぢ葉ながるかつらきの山のあきかぜふきぞしぬらし

神なづきしぐれもいまだふらなくにかねてうつろふかみなびのもり

みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるのにしきなりけり

雁 付帰雁

万里人南去 三春雁北飛 不知何歳月 得与汝同帰

潯陽江色潮添満 彭蠡秋声雁引来

〇四五朶の山ハ秋の雨に粧ひ [illegible] 秋の [illegible]
〇弓をおそれて月をとぶ [illegible]
〇雁が山川のとをきに [illegible]
〇碧落ハ天のそらの事也 雁が青き紙に字をかくに似たり [illegible]
〇碧玉のことし箏の柱を [illegible]
〇雲の衣 [illegible] 范叔 [illegible]
▲秋風に初雁がねのきこゆるハたがたまづさをかけてきつらんと
〇山のこしを帰雁がとぶさまハ斜に帯をひきたる如く [illegible] 水面の新しき虹ハいまだ巾をのべざるがごとし

四五朶山粧雨色 両三行雁[illegible]

驚弓羅遁 未抛鞍上之絃 月[illegible]

箋易迷 纔成渠於中流之水底

雁飛碧落書青紙 隼撃霜林破錦機

碧玉装箏斜立柱 青苔色紙数行書

雲衣范叔羈中贈 風櫓瀟湘浪上舟

あきかぜにはつかりがねぞきこゆなるたがたまづさをかけてきつらん

帰雁

山腰帰雁斜牽帯 水面新虹未展巾

虫

切く暗き窓下に啼く蟋蟀の聲秋を思ふ

ん〳〵夜半幽人耳

蟋蟀

新秋虫思若風枝未已搖孤

庭姫經御巷帝望賦宋玉風

山牧夜時自暗野雨風織孔

蕭蕭暗壁虫吟月色老

いまこゝろとめて聞秋よをあかしてもきかむ

▲秋の夜をよもすがらなくひとつ虫のかしがましきものかな

○山ものゝうち芒根のもて若ざるゆゑ小人もまれなるよし傳がうへさびしき秋は蕭〳〵聲をうらに

○邶風の詩に蟋蟀堂に在りて歳の暮を告る事をうたへり秋八月の比より漸寒氣に向ふ故に蟋蟀の聲を聞て秋の深行を知る

▲紅葉ちるよしを秋風にことよせて云ふ事古今集の秋の歌のみ也

▲夕月夜八日の月をいふ

○九月三日の月を弓張月といふ

○おちなんの夕ぐれ月をみざめして

▲さゐ〳〵と蕭のうへにきこゆるは秋の夜嵐

▲たのめつゝ人こゝろなき秋の夜を

鹿

蓼花清澗踏る紅葉声乾麻生林

暗を食茅刈多雪更深加茅逕風寒

をみちをもとめてなくしかのこゑ

秋ふかくなるまゝにやあさはらのうらみ葉

嵐

二ノ岳九月初三夜嵐紙上雅琴清

高蓼紅葉玉白風掃松聲雅琴清

ちゝそ
たゝまくくるる

霧

竹窓曉霧濕
八月九月正長夜
小井星希横杭石
擣衣晚杵風淸

雞鳴夕雪堆人枕
牀笔勾出弓勢
月下擣衣聲
横杭石南擣月下擣衣聲

▲ちゝのつまいやく別しこゝろ〳〵す
花見くさそつこゝろ

○まむちくく人まろ竹のそよきうふひ
こゝろ〳〵わろきの月ぜわりしくこゝ
辺人風ふる辺の風ごとのわろう見ひくる
わこゝろる風がふきそこ〳〵こゝろ
○名ぎうまこゝろつむハろ小(三)ともれの
もものるまのろ小公〳〵ろうこゝろ
人わり〳〵ろく歌すべきこゝ

▲ちゝのうきハれがろよ〳〵そこゝろ
せうくきうのこゝろ〳〵よくこゝ
○秋の夜ぜよこゝろちくつちのそと
ぐがこゝろくもすこゝろひきうきこ
○屋小のこゝろ歌史年のよ〳〵
〳〵こゝろぜこゝろ〳〵こゝ月きこゝ歌こ
きゐこゝのちこゝよ歌よ〳〵ひこゝろをれ
○わこゝくまぎきこゝろくわぜてく〳〵汎
月ぐすほくいこ孤独のこゝ日へ
まが加ぶのまりよわうろえこゝろ
ぜぜこゝぬきこゝまりくぐまこゝろ

擣衣

八月九月正長夜
小井星希横杭石
擣衣晚杵風淸
横杭石南擣月下擣衣聲

雞鳴夕雪堆人枕
牀笔勾出弓勢
月下擣衣聲

○名を客よりまをそつまきぬをうつく
より立ぜとものまうこゝ歌小御こ
むく〳〵ひぬんこ
○風のりよ紅ろ神のまぐびつれむろ
てろ三人のこととかりくわろ月のおも
ちのまむろ〳〵こゝろのろをそう着こ
○ちつれも枕のこのこゝろわぐ支
よろ〳〵ひの枕ろしとやろくおぐく
ぜこゝろ歌こゝまぬぬ
○年十月のこ終まうそぐ〳〵ろ
名のこゝろのこゝりろくろ〳〵ん
○四季の門ろ支よ紅ろ神のまぐびつれむろ
てろ三人のこととかりくわろ月のおも
れこゝろまおぐくおむをぐ〳〵きこ
○ろこまこ人こ名のこまりつけくろ
こ〳〵ろもちろれ紅くおこひこのこ
中こいろこ人〳〵ぜ名のこのろをれ
▲こゝろ〳〵ぜハ中つろこゝ紅
こ三時前のこゝ初そのこゝこ
つ〳〵ろこゝ

裁出遠近長短衣多悲
風雨書飛製神拳月夕梓無面眉低
辛く別思衣多悲
風雨書飛製神拳月夕梓無面眉低

冬　初冬

十月江南天気好
正是農家收割時
江畔漁舟分減万
村頭遊子尽帰

[illegible]

冬夜

一盞寒燈雲外夜　数杯温酒雪中春

年光自向燈前盡　客思唯從枕上生

[illegible]

歳暮

寒流帯月澄如鏡　夕吹和霜利似刀

風光易向人前老　[illegible]

ゆくとしのおしくもあるかなますかゝみみるかけさへにくれぬとおもへは

爐火

黄醅綠醑迎冬熟　絳帳紅爐逐夜開

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

霜

三秋岸雪花初白　一夜林霜葉盡紅

萬物秋霜能壊色　四時冬日最凋年

閨寒夢驚或添孤婦之怨　[illegible]

動先縮口噤鬢髪迫

君子夜深老翁暁鬢

聲々動驀亭鶴出寒驚人

霜積風藻鶯色收参花瓶鶴香

あさとさむひとをわかれしそ　あしたにハゆくへもしらぬ

雪

暁入梁王之苑　雪満群山

夜登庾公之楼　月明千里

銀河沙漲三千界　梅嶺花排一万株

雪似鵝毛飛散乱　人被鶴氅立徘徊

或逐風来不遇　振鮮鶴之毛衣晴

紛残錦旅狐之腋

翅似鶴籬撫瀟湘鶴心　与撲人

立於庭上頭為鶴　坐在炉辺手不亀

班女閨中秋扇色　楚王台上夜琴声

あさぼらけありあけのつきとみるまでに

よしのゝさとにふれるしらゆき

みよしのゝやまのしらゆきつもるらし

ふるさとさむくなりまさるなり

雪ふれハ木ごとにはなぞさきにける

いづれをむめとわきてをらまし

○梁の孝王　兎苑といふ

○雪のふるが鵝の毛のちりみだれとぶに似たり　人の鶴氅といふ

○雪の白きハ班女が秋の扇のごとし

[illegible]

氷 付 春氷

氷封水面聞無浪　雪点林頭見有花

霜妨鶴唳寒無露　水結狐疑薄有氷

おほそらの月のひかりしさむければかげみし水ぞまづこほりける

春氷

氷消見水多於地　雪霽望山尽入楼

氷消[illegible]　[illegible]牧

胡塞誰能全使節　[illegible]

やまかはの[illegible]

[illegible]

霰

[illegible]珠[illegible]寒

みやまにはあられふるらしとやまなるまさきのかづらいろづきにけり

仏名

香火一炉燈一盞　白頭夜礼仏名経

香自禅心無用火　花開合掌不因春

あらたまのとしもくれぬとつくりけんつみものこらずなりやしぬらん

としのうちにつもれるつみはかきくらしふるしらゆきとゝもにきえなん

かぞふればわがみにつもるとしつきをおくりむかふとなにいそぐらん

（ゐ）ゐさきに同志かき呼きよそのおもれとも集のひろそふそすくし邪狐乃ふ所をとそぶすをそくひらこころの手花比ふそを放かるかよふ云て友の集きをかひこ（ゐ）ゐれがのえおかまをかりよ婦のわきの夜ふきねそろぐも月七枝人ごろよさを廿く風まそきしくきぬそのそこしんけくくをしくこころうろ狩ハさねろもそろにちろう踏上の摺花の郭まる八月九月四集花とり多りをじそ狂句一軒ふう

和漢朗詠集巻之上

秋

さ蓂俯寄集秋起意見秋霊

摂政

右二句

淮南思婦秋擣帛月若風

右一句